

「雑草」という草はない」

会長 岩間 博

去る5月21日に開催されました令和5年度の総会におきまして、山田賢一先生の後任として本会の会長を務めさせていただくことになりました。

今年度は52名の新入会員を迎え、総計1000人を超える会となっており、会長として会員の皆様の期待に沿うことができるか不安ですが、小川和夫、鯉沼良久の両副会長をはじめ役員・幹事の皆様のご支援のもと精一杯その責務を果たしてまいりますので、よろしくお願い申し上げます。

総会後には、4年ぶりに懇親会を開催しました。お世話になった多くの先輩の校長先生方の元気なお姿や、またコロナ禍において学校や校長会の歓送迎会を経験されないまま本会に入会された先生方の明るい笑顔に接して、本会が会員一人一人にとって大切な再会、そして出会いの場であることをあらためて強く感じたひと時でした。

私も定年退職からまもなく10年を迎えようとしています。若い頃から身近な人や生徒の名前を忘れることの多かった私は、こうした会合に参加された方々の名前を思い出せるか心配になります。自信のないときは「先生、お久しぶりです」と言って会話を成り立たせ、徐々に昔の記憶を手繰り寄せてその場をしのぐテクニックも年齢相応の「老人力」の一つと、自分を納得させてきました。

そんな私に反省を迫る印象的な言葉に最近出会いました。現在NHKで放送中の朝の連続テレビ小説『らんまん』の主人公のモデルとなった植物学者の牧野富太郎が語ったといわれる次の言葉です。

「世の中に“雑草”という草は無い。どんな草にだって、ちゃんと名前がついている」

この言葉を知ったとき、若い頃に勤務校の校外学習で山の中を歩いていた時、生徒から「先生、この木は何という名前の木？」と問われ、「うーん、木だな」、「じゃあ、この草は？」「うーん、草だな」としか答えられなかったことを思い出しました。そして、『らんまん』の中で、主人公の万太郎が草花に語りかける姿を見て以来、私も畑の雑草の中に色とりどりの小さな花が咲いていたり、葉の色合いや大きさも様々であったりするなど、草にもそれぞれ個性があることにあらためて気づき、親近感を抱くとともに名前が知りたくなりました。

『まんてん』の中で、万太郎は次のように語っています。「雑草ゆう草はないき。必ず名がある。わしは楽しみがじゃ。わしが会おうたものが何者かを知るかが。わしは信じちゅうぎ。どの草花も必ずそこで生きる理由がある。この世に咲く意味がある。」

人に姓名があるように草花にも名がある。そして、人も草花もそれぞれが今そこに生きる意味が必ずあるということです。もしこのような気持ちをもってすべての生徒に接していたら自分はどのような教員になっただろうかとの思いもわいてきます。

今となっては、私も含め本会の会員も「高齢者」、「元校長先生」などと、ひとくくりになれそうです。しかし、実際には、会員それぞれが年齢や体力に応じて、教育、文化、スポーツ、福祉、芸術、地域活動等の様々な分野において今も生き生きと活躍されたり、学びを続けたりしてみえます。そうした個々の活動を結び付け、その存在を互いに認め合い、尊重し

合える場として、この旧会員の会を活かしていただきたいと思います。

そのために、会員の近況を伝えるこの「会報」も、毎日更新されている「ホームページ」も、会員の著作を紹介する「あーかいぶず」も、「女性の会」も、さらには7つあるグループ活動も、担当の各委員会、世話役の先生方のアイデアや個性を生かした形で維持・運営されています。これらの活動に新進気鋭の若手会員の積極的な参加を期待しつつ、本会が再会と出会いの場として、さらには会員それぞれの生きる意味を確かめ合う機会としてさらに発展するよう努めてまいりたいと思いますので、皆様のご理解とご協力をお願い申し上げます。